

巻 頭 言

時と空とのあはひにたゆたう「間（ま）」。確とした幅や大きさはなけれども揺るぎない存在感を放つ。この概念が日本文化において重要な働きをしていることに疑いはないだろう。時の中に現れる「間（ま）」（音楽や対話において感じられる「間（ま）」）、空の中に現れる「間（ま）」（華道や絵画において感じられる「間（ま）」）、そして時と空との両方に現れる「間（ま）」（舞台芸能において感じられる「間（ま）」）。「間（ま）」が立ち現れてこそ、ことばや音、絵や花は気韻生動し、芸術は芸術として躍動する。

一見すると何もなき「余白・隙」に思える「間（ま）」は、「からっぽの無」ではない。音楽や芸能であれば呼吸と律動の線上に、華道や絵画であれば造作の中に、音や色、形、広く言えば参加するもの・関与するものの「間（あいだ）」に顕れる「飽和充実した無」である。「間（ま）」は、地（背景）となって一歩退きながら図（肝心なところ）を照らし出し、図や全体を活かす働きをする。日本文化において捉えられる「間（ま）」は、無量無辺の存在現出可能性を帯びた、意味の充溢する場なのである。

「間（ま）」は、何らかの固定・固有の意味をもっているわけではない。参加するもの・関与するものである項と並ぶ、実体存在ではない。「間（ま）」自体は融通無碍な無実体であり、項ではなく差異なのである。

「間（ま）」は両義的である。参加するもの・関与するものを隔てると同時に、つないでいる。日本文化においては、項が先に在って、後からその間に「からっぽの無」という空隙が見出されるのではない。「間（ま）」は項と同時に現成する。いやむしろ、言語（ラング）において差異が項を生み出すように、「間（ま）」が在ってはじめて項が生み出されるというべきか。項は、あらかじめ意味をもつ自律した実体項なのではなく、関係項なのである。この意味において「間（ま）」は、参加するもの・関与するものたる項を隔てながらつながるものであり、項を存在現出させ、それに意味を吹き込む。時間・空間・世間・人間は「間（ま）」に包まれ、「間（ま）」に生かされ、隔たりながらつながり、意味のある統一体を作り上げている。

こうして考えてみると、ことばは「間（ま）」に立ち現れる、ことばの棲み家は「間（ま）」であると言えるのではなかろうか。ことばは、私のことばであって、かつ私だけのことばではない。言語（ラング）は個人に座を置きながら、個人を超えて「間（ま）」にわたっている。パロールとしてのことばもまた、時と時の間に、空の中に、人と人の間に、世の中に在って、参加するもの・関与するものを隔てながらつないでいる。人に紡がれたことばは、送り手の支配を離れ、かつまた受け手の恣意にも委ねられない。ことばは自他が融和する「間（ま）」に在って、「間（ま）」に這い出し、隔たれた人と人とをつなぐ。ことばの顕れとともに「間（ま）」は可感的な意味現象となり、ことばからは絶えざる意味が溢れ出る。そしてことばは、参加するもの・関与するものを創出し、新たな意味を与えていく。

ここに寄せられた論考は、すでに著者の手を離れ、「間（ま）」に在って、新たな読み手を待っている。「間（ま）」が取り持ち、書き手と読み手という役割を人に与え、人と人をつなぐだろう。盛夏のひと時、「間（ま）」に想いを馳せながら、語られたことばを味わい、思惟し、意味の場を泳ぎ渡るのも悪くない。

（井原奉明）